

第Ⅲ章 遺 跡

今回報告する古墳時代の遺構は 6AAW・X 地区の溝 SD6800, 円筒埴輪を用いた墓 SX6035 と 6ACA 地区の溝 SD8520・SD8521, 堰 SX8523, SX8524 などである。各遺構について述べるまえに平城宮周辺の古墳時代の遺跡の状況と立地について簡単にふれておきたい。

1 遺跡の概観

佐紀盾列古墳群

平城宮の背後には、奈良盆地北端を画して東西に広がる平城山丘陵があって、この平城山丘陵及び東側の佐保山丘陵は奈良盆地における屈指の古墳地帯である。平城山丘陵の尾根筋には大小の前方後円墳、帆立貝形前方後円墳、円墳が営まれており、佐紀盾列古墳群と称している。時期的にも前期から後期に及んでいる。おもな古墳をあげるならば、もっとも東に位置するウツナベ古墳をはじめとしてコナベ古墳、磐之媛陵、市庭古墳、神明野古墳、猫塚、瓢箪山古墳、塩塚、マエ塚、日葉酢媛陵、成務陵があり、そして西端には神功皇后陵がある。この他に埴輪円筒棺墓、陶棺を納めた歌姫横穴墓も知られている。これらの古墳のうち、平城宮域内にある市庭古墳は現在平城天皇陵に治定されているが、平城宮の発掘調査によって周濠を持つ南向きの前方後円墳（全長 250 m）であることが判明したもので、最近の調査で二重の濠が確認されている。また、神明野古墳も平城宮の発掘調査によって初めて存在が確認されたもので、宮の造営に伴う削平工事によって既に墳丘はなくなっているが周濠をとまなう全長 105m の前方後円墳である（PLAN 1）。

市庭古墳

神明野古墳

平城宮の地形

つぎに平城宮域の地形についてのべると、宮の北半部は丘陵本体から派生した三つの支丘とこれにはさまれた二つの谷地形を含み、宮の南半部は丘陵末端の微高地と沖積平野からなっている。宮北端の標高は78mあり、南面大垣付近で64.5mであり、比高差は13m強である。三つの支丘のうち、東側の台地は東北方のコナベ古墳付近から延びてきて、東院地区、法華寺、海龍王寺などが含まれ、その西縁は水上池東岸から東院の西を通り、宇奈多利神社の南側で方向を転じて東行し、佐保川と菰川に沿った低地に連なっている。本台地上の各所からは従来より埴輪片等が出土することが多く、

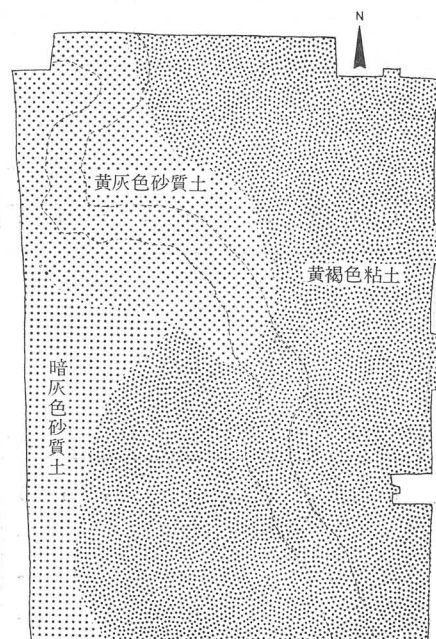


Fig.4 古墳時代遺構面の土質

昭和52年にコナベ古墳の南側、法華寺との中間で周濠を持つ全長 110 m 規模の前方後円墳 1 基が確認されており、また、台地西縁にあたる東院地区からは方形周濠墓 1 基が検出されている。

中央の台地は広く、平城宮の中心部をほぼ包括し、東西 500 m、南北 700 m 余りの範囲には内裏北方官衙、第一次朝堂院・大極殿院、第二次・朝堂院内裏が含まれ、市庭古墳は宮の造営時に後円部の一部と前方部、周濠が削平・埋め立てられて、周濠の一部は園池に利用される。南側の神明野古墳は内裏と大極殿回廊にまたがり、雛壇状の地形に整えられた際に、基底部から上の墳丘は全て削平されたものである。6AAW・X区はこの舌状に南へ広がる台地の南端の沖積平野との境近くに位置するが、台地と沖積地との接点は現地形では明瞭でなく、僅かに東北から西南へ延びる稜線の痕跡が認められる程度である。土質は内裏付近では床土直下は洪積層の礫含みの地山であり、6AAW・X区ではシルト層が認められる。

つぎに西側の支丘は前二者と比較して張り出しは弱く、宮の西北部にかかる程度で、丘尾は西と南側で秋篠川左岸沿いの微高地と沖積平野に移行する。中央の支丘との間の谷筋は狭隘ながらも深く、日葉酢媛陵の東、瓢箪山古墳との間を通り、さらに水流は歌姫にまで達する。6ACA 地区はこの谷の開口部に近く、御前池と佐紀池の築堤等のことを除くと起伏に富むこの周辺では大きな地形の改変はほとんどおこなわれていないようである。

2 朝集殿下層遺構 (6AAW・X 区)

すでに述べたように 6AAW・X区は宮の東半を占める第二次朝堂院の南端近くにあり、北から南へ緩く下降する丘陵の端部東側に位置する。古墳時代の遺構は奈良時代の遺構面より約 40 cm 下の地山面で検出した。この間の堆積層は 2 層あり、上半は茶褐色土で下半は土師器を少量含む灰褐色土であり、いずれも平城宮造営時の整地層である。地山面は調査区の東半が黄褐色粘土層で、西北部では SD6030 の両岸が黄灰色砂質土層、西側南半部では暗灰色砂質土である。なお北端東寄りに地山面が落ち込んだ箇所があり、この部分は、宮造営時に暗灰色粘土で埋め立てられていた。地山検出面の高さは北西部がもっとも高く、海拔 63.9 m で南および東側に向って低くなり、東北隅で 63.6 m、南東隅で 63.2 m を示している。したがって旧地形は北面から南東へ緩く傾斜下降していたことになる (Fig. 4)。

遺構検出面

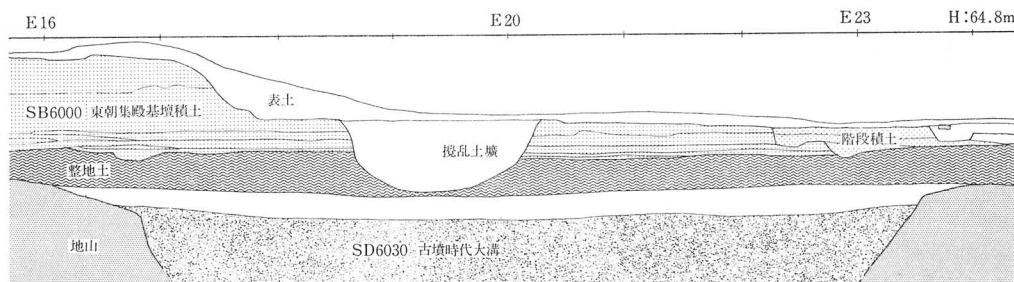


Fig. 5 東朝集殿基壇とSD6030との関係

北区は発掘区北端では曲折点のために流路が西から東へ移動したために溝幅は6m、深さ0.9m近くに及ぶ。旧流路はほぼ南北に向い西肩とテラス状の溝底が認められた。流路は後に溝東岸を浸蝕して深さを増して東に移る。新流路西肩には丸木杭が3ヶ所に打ち込まれたSX6032があり、護岸的な施設の一部であったとみられる。曲折部の南側のM・N16区では溝幅4m、深さ1.3mあり、溝底は狭く、断面はV字形に近い。

南 区 層 序 ている。堆積層は北区と同様に大きく上下層に分かれ、北半部では下層は下から順に砂、植物質腐蝕層をはさんで砂が2層、粘質土が1層ある。上層は植物質腐蝕層、粘質土の3層からなる。南側Rラインではやや異なり、下層は最下層の粗砂と、レンズ状に入る砂層を除くと、粘質土で占められる。そして上層は下から砂、粘質土、砂となり、最上層の砂は、北半部にはな



く、Lラインには類似する細砂層がある。なお、上層の黒色粘土層からは大量の板、棒、梯子などの木製品が折り重なって出土しており、土器も多量に含んでいる。また下層の黄褐色砂にもかなりの数の木製品が入っており、梯子や大型部材はこの層から出土している。なお、溝の下降度は北区北端を0とした時、南区南端では-0.82mであり、1°弱の傾斜をなしている。

以上のようにSD6030の堆積層は北区北端の曲折部を除くと、上下2層に分かれ、さらに細分すると7～9層に区別できる。しかし、各細別層は全区にわたって連続するとは限らず、また局部的な間層も存在していることから、各層序については砂質土層と黒色粘土層を上層から順にⅠ砂～Ⅳ砂、Ⅰ黒～Ⅳ黒と呼称して各部分に対応させた。したがってⅠ黒ではあっても場所によって砂層を含んでいることもあり得る。

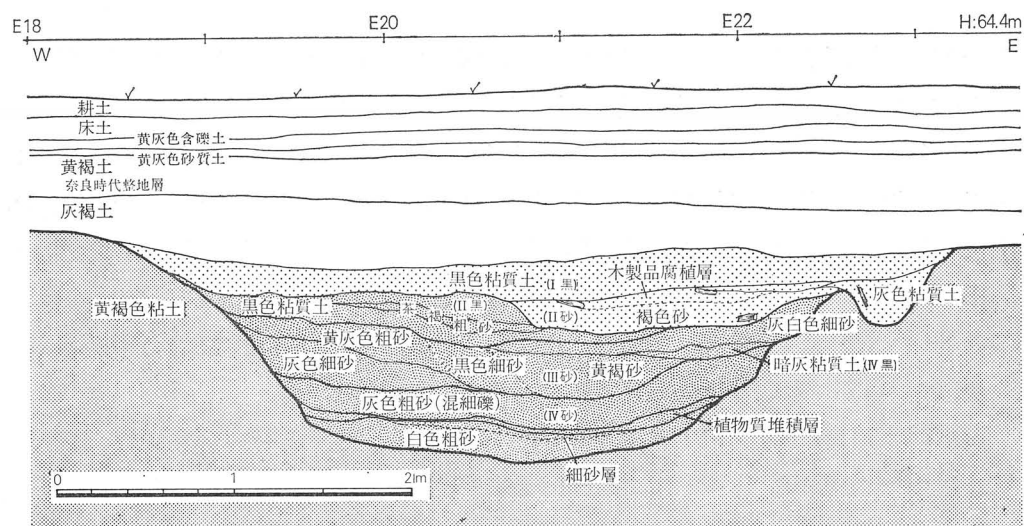


Fig. 7 SD6030 南区土層図

B SX6035 (PLAN 2・5, PL. 9・10)

主体部に円筒埴輪を用いた墓であり、大溝SD6030の東20mの地点にある。朝堂院東面築地に東接しており、平城宮造営時に上半部が削平されているが、墓壙は黄色粘土の地山を掘り込んでつくられ、一辺が1.8mと0.5mの長方形を呈し、長軸をほぼ南北に置く。壙底はほぼ平らな面をなし、深さ0.15mが残存している。墓壙内には縦に半截した円筒埴輪3個を外面を上にしてならべ、棺蓋とし、南側の小口は同じく円筒埴輪片を並べて閉塞している。棺の全長は1.7mで、最大幅は0.4mである。なお中央より北側が幅広であることから、北側に頭部を置いたものと推定されるが、副葬品に類するものはなかった。

埴輪円筒棺

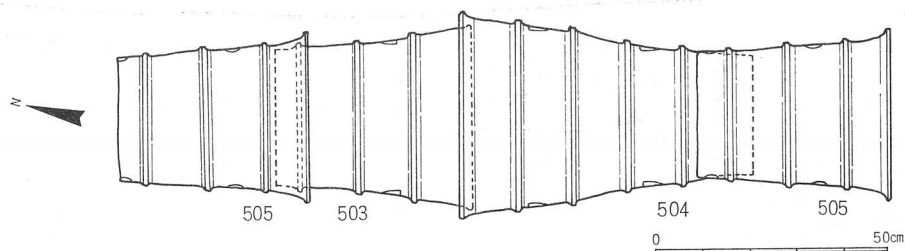


Fig. 8 SX6035 復原組合せ

C その他の遺構 (PLAN 2・5)

そ の 他
の 遺 構

埴輪を出土した土壌 SK6037, 溝SD6038, 土壌 SK6033・SK6034 などがある。SK6037 と SD6038 は調査区東端を南北に延びる築地 SA5985 の下にある。SK6037 は東西 1.6 m, 南北 2.1 m 以上の不整楕円形をした深さ0.12mの皿状の土壌で, 埋土から盾形埴輪と家形埴輪が出土した。SD6038 は土壌よりも古く, 西北から南東に向う幅1.75m, 深さ 0.3mの溝であり, 遺物はないが, SK6038より古いことから古墳時代の遺構とした。SK6033・SK6034 は大溝の東岸沿いに点在する小ピットで, 出土遺物はない。

3 佐紀池下層遺構 (6ACA区)

第 101 次調査は佐紀池の北岸寄りでおこなっており, 古墳時代の溝 2 条と堰 2 箇所を検出した。この位置は北方の日葉酢媛陵と瓢箪山古墳との間から南へ延びてきた谷の開口部にあたり, 東西の丘陵端間距離は 100 m 程である。検出した古墳時代の遺構はこの谷口の東寄りの低地にあって, 谷水の自然排水路として機能していたものとみられる。層序は上から沈泥層, 灰色砂, 黒色腐蝕土層, 植物腐蝕混り黄褐色粘質土, 黒褐色砂質土, 灰褐色砂質土, 灰白色砂混り粘土層, バラス層であり, 黒褐色砂質土上面で奈良時代の園池に達しているが, 古墳時代溝も同じ面で検出した。なお, バラス層からは縄文式土器が出土しており, 層の厚さは 1.5 m 以上あるが, 地山については湧水のために確認できなかった。

A SD8520 (PLAN 6・7, PL. 11・14, Fig.9)

発掘区の中央を北から南へ蛇行して流れる溝で, 長さ27mを検出した。溝は発掘区北端から南へ 8 m の位置で 2 つに分流する。本流は「く」字状に東南に曲がり, さらに 南西に流れを変える。分流した溝は東北方へ U 字形に曲がって再び南北溝に合流する。分流の起点には堰 SX8524 が設けられる。

溝の堆積層は北半部では下から粘質土及び粘土, 砂, 砂質土の 3 層に分かれる。下層溝は幅約 5 m, 深さ 1.0m あり, 分流点で幅と深さを増し, 南端では幅 1.8 m, 深さ 0.5m と狭くなる。また上層の堆積時には溝幅は北端では下層時期とはほぼ同様であるが, 分流点付近, 及び分流溝は埋まり, 浅い澱みになっていたとみられる。

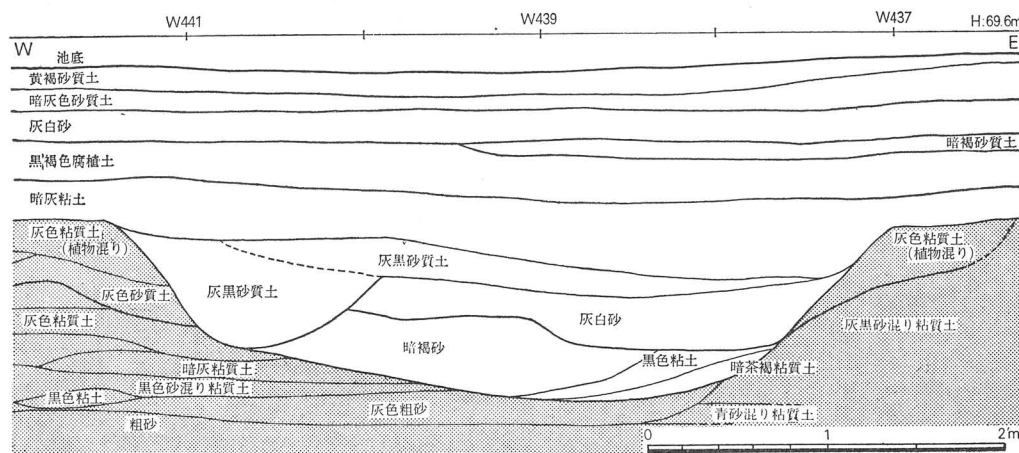


Fig. 9 SD8520北端土層図

なお南半部では北半の下層粘土、粘質土がなく、かわりに有機物を多く含む黒色土が厚く堆積する。ただし、この有機質黒色土は北半の溝肩にある灰色粘質土とは異なる。各層からは土師器、木製品の他に自然木、果核、ヒョウタン、昆虫遺体などが出土しているが、流木が分流点付近に集中している。

B SD8521 (PLAN 6・7)

SD8520の西南岸にとりつく幅1.5 m、深さ0.5 mのV字溝である。合流点近くには堰SX8523がある。堆積層は上下2層に分かれ、下層は小礫含みの灰黒色砂層、上層は有機物の混った黒色砂層である。上層からは土師器が出土している。

C SX8523 (PLAN 6・7, PL. 14, Fig. 10)

SD8521がSD8520に合流する位置に設けられた堰であり、溝と直交して8本の丸杭を打ち込んでおり、中央部を開口する。杭列の前面には丸木の横材3本が残存している。

またこの堰の北側にも堰とみられる小ピット列と丸杭1がある。

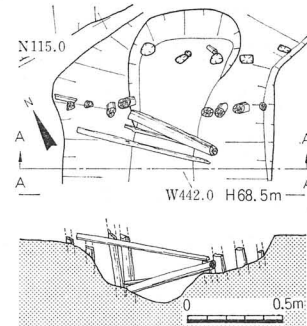


Fig. 10 SX8523 堰

D SX8524 (PLAN 6・7, PL. 14, Fig. 11)

SD8520の分流点に設けられた堰である。流路中央部分をあけて両岸間に矢板を計9本打ち並べ、南岸では自然木の根を用いて矢板に根がらみさせて固定している。なお、堰の東側は1.7 m程の間が水流による深みになっている。矢板は幅10~15cm、厚さ5 cmの先端を尖らせた割板である。ただ杭は溝底以下に打ち込まれたものは1本のみで、他はすべて溝底面かその上でとどまっており、堰が設けられたのは砂層が堆積した後のものである。

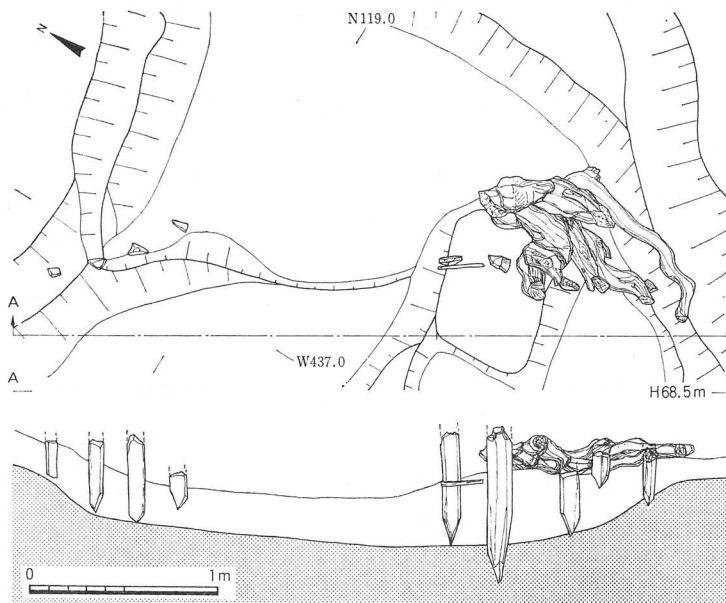


Fig. 11 SX8524 堰